

AIには到達できない「Intelligence」 – 『神は細部に宿る』 –

AIが、われわれホワイトカラーの仕事を奪うと言われはじめました。そのとおりだと思います。「機械のように正確な仕事をしてきた人」には、AIはものすごい脅威です。

でも、**Intelligence**を持っていれば、仕事を失うことはないと思います。知財調査における**Intelligence**は、以下のようなものだと思っています。

2010年11月、JAPIO（日本特許情報機構）の「特許情報フェア」で基調講演をしました。

標題を『経営に資する知財情報』とし、副題に『**Information**から**Intelligence**へ』と書き加えました。言いたかったことは、これからの時代、知財情報を扱う調査マン・ウーマンは、**Information**の収集に留まらず、**Information**を加工して**Intelligence**へ昇華させるべきだ、ということでした。

Intelligenceを辞書で調べると、右のようになります。「知能」そして「諜報」です。

特許情報を集め、それを解析してライバル会社の活動内容を明らかにする。**情報を歴史として捉え、ライバルが歩んでいる方向を見定めて示す**。それが経営に資する知財調査であると主張しました。

そして、それを実行しました。いまでも継続して**Intelligence**を追い求めています。

最近になって、ようやく『**Information**から**Intelligence**へ』が注目を集めるようになりました。日経新聞で7月に紹介された『IPランドスケープ』もそのひとつです。

でも、なかなか難しいこともあるようです。長い間やってきて、わかり始めてきたことですが、**Intelligence**を追求する仕事は、誰にでもできるものではないようです。

だからこそ貴重なのだ、と思います。ある種の『暗黙知』が必要かもしれません。

以前、**Intelligence**仕事の権化、手島龍一氏と佐藤優氏の**Intelligence**についての考え方をまとめたことがありました。下記のとおりです。参考にしていただき、みなさん独自の**Intelligence**を作ることをお薦めします。**Intelligence**は、生きていく上で、とても強い武器になります。

Intelligenceは「Informationの海」から紡ぎだすもの（手嶋龍一）

そもそも「Intelligence」とは、一般に思われているような「極秘情報」とか「スパイ情報」とかいったものとは、いささかニュアンスが違い、欧米の識者の間ではもっと広い意味で使われています。膨大で雑多な「一般情報」つまり「Informationの海」から、ダイヤモンドの原石のような貴重な情報を選び抜き、分析し、問題の核心を**Intelligence**として紡ぎ出した情報。まさしく最後の一滴が「Intelligence」です。

国家の運命を委ねられた指導者が、和戦の岐路に立たされたとき、最後の決断を下す決定的な拠り所が「Intelligence」なのです。

Intelligenceの仕事は、「個人芸」「職人芸」（佐藤優）

Intelligenceの仕事は、組織ではなく、一個人の能力や手腕に頼る「個人芸」「職人芸」の世界になっています。テラビブ郊外にある「カウンターテロリズム・センター」に行きましたが、なんとたったひとりの中年男性が運営しているのです。「反テロ研究」が三度の飯よりも好きで、カウンターテロリズム学を「歴史と哲学と宗教と軍事と**Intelligence**をすべて総合した科目」だと自ら定義しているんですよ。それもあくまで「個人**Intelligence**」として単独で研究している。

その能力は非常に高く、モサドやアマン（イスラエル参謀本部諜報局）といった組織も彼の能力に大いに頼っているといえますから、間違いなく本物ですよ。では、彼がひとりでどうやって肝心の情報を入手しているのか。驚いたことに、情報源は「インターネット」。あとは「自然にいろいろ教えてくれる人が出てくる」のだそうです。秘密情報など何も持つてはいないのです。

ふたりが共通して述べていること。それは『神は細部に宿る』ということではないでしょうか。

